は じ め に

この本は，環境倫理学について何も知らない人が，その周辺を含めてひと通りの知識を得るために必要な本を集めたブックガイドです．

ここで紹介する本は，大学生（学部生）が環境倫理学の授業のレポートを書くときに参照すべき本ともいえます．本書の原型は大学（学部）での環境倫理学の授業の中で配布した参考文献リストにあるからです．環境倫理を「机上の空論」ではなく実践的な規範として構築するためには，現実に起こっている問題や，さまざまな分野のアプローチから学ぶ必要があります．そこから授業では，いわゆる「倫理学」の本よりも，「環境学」の文献を多く紹介してきました．

今回，参考文献リストにかなり手を加えて100冊の本を選び直しました．選書に際しては，以下を基準としました．

（1） 初学者が読んで興味が持てるような本，入門的な本を多めに選びました．より本格的に学びたい人は，ここで取りあげた本の参考文献表などを活用してください．

（2） 日本語の本に限定しました．洋書については，ここで紹介した本の参考文献表などを参照してください．

（3） 原則として，著者１名につき１冊を選びました．特定の著者の本をたくさん選んでしまうのを避けるためです．ただし例外的に２冊の本を選んでいる場合もあります．

（4） 古い本も遠慮なく選びました．中には絶版の本もありますが，図書館に所蔵されていたり，古本で買えたりしますので，アクセス不可能ではないと考えました．

（5） 複数のバージョンがある本（単行本，文庫本など）については，基本的に新しいバージョンを紹介しています．見出しの部分には，出版社だけでな

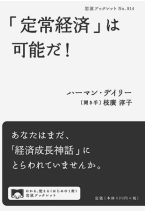
く，その本の形態についても記載しました（「ちくま新書」など）．本文中カッコ内の数字は，そのバージョンの本のページ数を表しています．

本書は二部構成で14の Part に分かれています．第Ⅰ部は，これまでの環境倫理学の枠組みを理解するための本を50冊選びました．第Ⅱ部は，環境倫理学の枠組みを拡張するような50冊を選びました．各部の冒頭に，どんな本を選んだのかを簡単に記しておきましたので，まずはここを読んでみてください．

本書はブックガイドですので，どの項目からでも読むことができます．ただ，最初から順を追って読んでいただくと，一つの「流れ」が見えてくるようになっていますので，一度お試しいただければと思います．

このブックガイドが，みなさんの「本選び」の参考になれば幸いです．

『「定常経済」は可能だ！』



ハーマン・デイリー，枝廣淳子
岩波ブックレット，2014年

▼環境経済学の第一人者が語る「定常経済」の具体像

ハーマン・デイリーは世界的に有名な環境経済学者であり，「定常経済」と「デイリーの三条件」の提唱者として知られている．それらは，J.S. ミルが『経済学原理』の中で唱えた「定常状態」の理念を現代の環境問題の文脈をふまえて実現させようとするものである．加藤尚武は，『地球環境読本Ⅱ』（丸善）の中で，デイリーの三条件を「一，生物資源を永続的に利用するための収穫の制限，二，枯渇型資源の再生型資源への転換，三，分解・吸収能力以下の廃棄物の排出」とまとめ，環境教育ではこれを必ず教えなければならないと主張している．本書は枝廣淳子の質問にデイリーが答える形で進むが，その中でデイリーの主張のエッセンスが見事に引き出されている．

◇

第Ⅰ章では，なぜ「定常経済」が必要なのか，が語られる．

第一に，デイリーは，世界が「空いている世界」から「いっぱいの世界」に変わったことを重視する．「空いている世界」では漁船の数を増やすなど，人工資本に投資すれば効果的だが，「いっぱいの世界」では魚の数が戻るようにするなど，自然資本の再生能力を高めることが効果的になる．

第二に，デイリーは，経済成長は今や経済的ではないと主張する．経済成長のための費用よりも，経済成長による便益が大きかった時代は，経済成長は良いものだったが，先進国では1980年ごろから，便益よりも費用のほうが大きくなり，不経済成長になっているという．それは，GDP の中身を費用と便益に分けて，費用を差し引いた実質的な便益を概算したことなどから判明したことである．

デイリーは，途上国には経済成長が必要なことは明らかだとした上で，「いっぱいの世界」では，先進国は定常経済に移行して，経済成長が必要な途上国に資源やエネルギーを回すべきだと述べている．

◇

第Ⅱ章では，「定常経済」の中身が語

られる．

定常経済とは「一定の人口と一定の人工物のストックを，可能な限り低いレベルでのスループットで維持するもの」(21）である．

そこでは，希少性についての考え方を変えることが必要になる．「あらゆる希少性は相対的なものだから，代替によって解決できる」と考えるのではなく，「希少性には絶対的なものがあって，代替によっても解決できない限界がある」と考えるのが定常状態なのだ（27)．

定常経済においても技術の進歩が必要になる．そこでは「より少ない自然資本で質の高いモノやサービスを生み出す能力」が求められるからである（35)．

「定常経済」と「うまくいっていない成長経済」とは別物である．定常経済はヘリコプターのように留まって安定しているのであって，前に飛べなくなっている飛行機とは違うのである（38)．

その他，デイリーが「定常経済」を着想した経緯や，経済学における「定常状態」の系譜についての話も興味深い．

◇

第Ⅲ章では，どうやって「定常経済」へシフトするのかが語られる．

定常経済のポイントは自然資本の維持にある．そのためには自然資本については利用の上限を決めたうえで取引をすること（キャップ・アンド・トレード）が必要になる．市場は「資源の効率的な配分」はできるが「持続可能な規模を決める」ことはできない．それを決めるのが政府の役割になる．

◇

それらをふまえて，デイリーは「定常経済」へシフトするために必要な「一〇の政策」を列挙している．キーワードだけを挙げていくと，①資源のキャップ・アンド・トレード，②環境税改革，③所得格差の幅の制限，④労働日数の柔軟化，⑤国際貿易に対する規制，⑥ WTO・世銀・IMF の降格，⑦準備預金の準備率を100％にする，⑧特許制度の見直し，⑨人口の安定化，⑩ GDP の計算方式の改革．

これらの詳しい中身については本書を読んで確認してほしい．よくあるインタビューだと，「ではどうすればよいのか」という処方箋については，お茶を濁されることが多いのに対し，このインタビューではきわめて具体的な回答が得られている．これは，聞き手の枝廣淳子が，聞きたいこと，聞くべきことをストレートに聞いているからであろう．本書からは，デイリーの理論だけでなく，有益なインタビューの仕方についても学ぶことができる．